

新規受注増加の兆し

7月のプレカット調査

稼働90%で木材消化遅れる

プレカット市場では、ようやく需要増加の兆しが出てきた。7月分から新規受注が増え始めたというプレカット工場の声が目立ち始めた。ただ、依然として職人や住設機器不足などで建設現場の遅れも続き、工場に加工材がたまって生産にも影響を及ぼしている。こうした背景から工場稼働率が90%前後で続き、木材の消化速度は遅いまま。そのため、港頭・プレカットの木材在庫が高水準で推移し、昨年同時期とは真逆の様相を呈している。

本紙の全国プレカット25社を対象とした稼働状況調査（別表）によると、7月の地域別平均受注は94・3%（前年同月比2・4%減）と3カ月連続で増

%を超えていた。ただ、22年1～5月までの90%前後からはようやく抜け出し、需要期に入ってきたことがうかがえる。

7月のプレカット稼働率調査（全国平均表）

単位：%、（ ）内は前年比

	6月(稼働)	7月(受注)	8月(見積り)
北海道	97.0(87.0)	106.0(108.0)	95.0(118.0)
東北	75.0(100.0)	80.0(90.0)	85.0(100.0)
関東	95.0(135.0)	88.3(109.3)	94.7(102.3)
中部	101.0(96.3)	101.7(100.3)	95.3(116.3)
関西	88.5(120.0)	88.5(104.0)	90.0(113.5)
中国	95.0(115.0)	95.0(84.5)	70.0(90.0)
四国	87.0(82.0)	93.0(90.0)	90.0(93.0)
九州	88.5(100.5)	102.0(95.0)	89.0(90.0)
全国平均	90.9(104.5)	94.3(97.6)	88.6(102.9)

※全国平均に回答なしのエリアは含まず

こうした数字が示すように、プレカット工場からは今回調査から急に受注増の声が聞かれ始めた。「6月に入り受注量は上向きになり、集合住宅も増えてきた」「4～6月と比較しても見積もりが増え、7月分の受注は上向いた」（工場）などの声が少なくない。

良ければ売れているが、市場全体としては落ち着いてきている」と、注文系ビルダーの不振を指摘する。両者の温度差から察すれば、まだ市場全体としては新規需要が立ち上がり始めたところだと考えられる。

22年1～3月は本来

不要期であるにもかかわらず、それまでの建設遅れから需給は緩まなかった。その結果、受注・稼働ともに上向くはずの4～6月が、1～3月と同水準で推移した。これが21年の木材・合板・住設・職人不足による建設3カ月遅れの影響による不要期であれば、7月から新規需要が立ち上がったくるはずだ。ただ今回は、そこに住宅価格高や21年の需要先食いなどの需要反動減も重なっているため見通しにくかった。

6月の稼働平均は90・9%（同4・5%増）と、2カ月ぶりに増加した。20～21年と同様に1～6月まで90%水準だが、19年までは6月から100%を超えていた。この3年、1～6月は90%の稼働率が続いているが、今年は港頭のみならずプレカットの木材在庫も多い。そのため、港からの出荷が遅いうえ、年内分を確保している工場もある。国産合板は12ミ厚3×6判で中国産などの入荷が増え、不足感は緩和した。

ただ需給は均衡している。長尺もまだ目立った不足感はないものの、一部工場では代替の必要性を指摘する。